

英語科教育法における英語学の意義

— 日本人英語学習者のための教員養成における
第二言語・外国語習得論的考察 —

大 山 健 一*

キーワード：英語科教育法，教員養成，英語学，第二言語・外国語習得論，英語教育学

1. 目 的

本論文では、外国語（英語）の教員養成において如何にして英語学が必要であるのかを提唱することが目的である。この英語学は教諭免許状取得において、英語音声学、英文法、英語史（国際共通語としての英語を含む）の3つに分類される。しかしながら、ただ単に知識として学ぶだけでは英語科教育法との繋がりが希薄となってしまう。よって、その懸け橋となるべきものとしては、第二言語・外国語習得論が挙げられる。日本人が英語を学ぶ際に注目しなくてはならない点は何であるのか、英語を教える際に気を付けなければならない点は何であるのか、この2つの点で理論と実践が成り立てられることを提唱する。

2. 英語音声学との関わり

まず、英語音声学との関わりとして、「文字と違って音声は目に見えない」ということを認識する必要がある。特に、内容語（Content Words）と機能語（Function Words）の2つの概念を熟知するのが良い。前者は文の意味を示す品詞の総称で、名詞、動詞、形容詞、副詞、疑問詞、間投

詞、否定詞などを指し、後者は文の構造を示す品詞の総称で、代名詞、be動詞、助動詞、冠詞、前置詞、接続詞などを指す。前者は辞書通りの発音となるが、後者はその通りにならないのが普通である。つまり、機能語が発音されないから、または聞き取れないからといって、意味が分からなくなるということは少ないのである。内容語を明瞭に発音できるようにすることと、内容語に注目して聞き取りが出来るようにすることが大切である。このようなことが英語のリズムとイントネーションに結び付けられているためである。

英語科教育法では、聞き取りにおいては、穴埋めをする際の機能語を埋めさせるような問題と、ディクテーションをする際の全文を書き取らせる問題は、意味を成さないことに気付かなければならない。換言すれば、内容語から文の意味を理解することが重要である。発音においては、機能語を弱く発音することで、内容語が際立つことを把握する必要がある。特に、日本人においては、母語である日本語に弱く発音するという概念が存在していないため、理解していても実際に発音できないケースが多く見受けられる。しかしながら、機能語を弱く発音しないで、内容語をより強く発音することは「経済性の理論」（発音のし易さ）からは不適切である。機能語を強く発音してしまうことは、「強勢」の応用形（対比強勢や誇張表現など）に当てはめられ、ある種の特別な意味が

2017年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科助教 言語学、外国語教育

付与されてしまい、「文字を超えた情報」が含意されることに注意しなくてはならない。よって、まずは、機能語を弱く発音するという現象である「弱音化」(Weakening)から辞書通りの発音にならないようにするのが望ましいと考えられる。

3. 英文法との関わり

次に、英文法との関わりとして、「前後の単語の関係」ということを認識する必要がある。英語学習の初期に学ぶ「文型」において、日本語での主語+目的語+述語と違って、英語では主語+述語+目的語になることはよく知られている。このようなことは狭義的な概念であり、広義的には、形容詞は名詞を修飾する、副詞は名詞以外を修飾する、などの品詞の修飾関係や、単語は前から修飾する、句は後ろから修飾する、などの語順の修飾関係などと文中の語配列にまで当てはまる。

英語科教育法では、文法という規則性に合わせるだけでは通じる英語にはならないことに気付く必要がある。この文法はあくまでも1つの文における守備範囲を指している。しかしながら、実生活では、1つの文だけでコミュニケーションは成り立っていることはなく、複数の文による会話や手紙、企画書などが常である。複数の文においては、1つの文と次の文との関係が重要視され、類語(Thesaurus)と連語(Collocation)の概念が働き掛けられている。前者は「ある語句を別の表現にした語句」のことで、後者は「ある語句による特定化した語句」のことである。類語においては、1つ目の文にTomがあれば、次の文にはHeとなるような呼応関係を指している。元々は「日本語では同じ内容は同じ表現にし、別の内容は別の表現にする」が、「英語では同じ内容は別の表現にし、別の内容は同じ表現にする」ためである。連語においては、「する」という日本語の意味において、part-time jobではdoやworkとなり、speechではmakeとなり、experimentではcarry outになるような呼応関係を指している。これら2つの概念は、文法的に正しいかどうかに関与されるのではなく、「文法の上に存在

する概念」と把握するのが良いと考えられる。

4. 英語史との関わり

最後に、英語史との関わりとして、「ローマ字表記との関係」ということを認識する必要がある。英語をローマ字読みとしない点に繋がるが、初期の英語学習において、多くの壁となり得る事例である。例えば、haveとmakeであれば、カタカナ表記とすると、前者は「ハヴ」、後者は「メイク」となる。では、何故前者が「ハヴ」であれば後者は「マク」にはならないのであろうか、何故後者が「メイク」であれば前者は「ヘイヴ」にはならないのであろうか、という疑問が挙げられることは当然である。これらは歴史的な理由であることを知らなくてはならない。古英語から始まり、中英語、近代英語、現代英語へとの変遷において、元々はローマ字読みをしていたが、「大母音推移」(Great Vowel Shift)を代表とする歴史的音変化を通して、ローマ字読みをしない今現在の形に変わったということである。そして、「世界の英語」(World Englishes)を代表とする「4つの英語」(イギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語、オーストラリア英語)や、アジア英語やアフリカ英語などの「第二言語としての英語」(English as a Second Language)とヨーロッパ英語などの「外国語としての英語」(English as a Foreign Language)を理解するためにも、欠くことの出来ない点である。

英語科教育法では、規則性のあるものから学ぶのが良いと考えられる。例えば、語末の-eは「黙字」(Silent Letter)であることや、語末の-yは「イ」と母音になること、などが挙げられる。これらと同時に、「英語はローマ字読みをしない」という鉄則を初期の学習段階から提示することで、電子辞書やウェブに頼ることなく、本来の読み方が可能になると考えられる。「フォニックス」という読み方の規則を法則化したものが存在するが、例外が多いとの理由から、初等・中等教育下では教育現場では軽視され続けている。しかしながら、英語を教える上では知っておく必要性はあり、時

にこのフォニックスにより解決できる学習の壁も存在する。換言すれば、フォニックス学習・指導を軸にして、自分自身に合った学習方法と指導方法を見出すことが良いと思われる。

5. 第二言語・外国語習得論の重要性

以上、英語音声学、英文法、英語史を英語科教育法から考慮したが、第二言語・外国語習得論としての要となる理論を理解しておくことが重要である。第二言語・外国語習得論においては、母語が習得に良い影響または良くない影響を与える「転移」(Transfer)、一般化・ルール化を全てに当てはめようとする「過剰般化」(Overgeneralization)、母語と対象言語の構造距離の相違が習得に影響するという「言語距離」(Language Distance)、習得が易しい普遍的な現象である「無標性」(Unmarkedness)、習得が難しい言語特有な現象である「有標性」(Markedness)、などが挙げられる。

特に、これら3つの英語学との関わりにおいては、「言語距離」を把握するのが良い。この概念は言語習得論(特に音声・音韻習得論)において、その距離が近い(より似ている)と習得が容易であるという説 Perceptual Assimilation Model (PAM) (Best 1995) がある。他方、その距離が遠い(より似ていない)と習得が容易であるという説 Speech Learning Model (SLM) (Flege 1995) がある。具体的には、日本人が英語の [l] よりも [r] の習得が困難であった場合、日本語のラ行音は [l] よりも [r] の方が遠いという理由になる。

同時に、この「言語距離」は「距離が近いから習得が容易である」「距離が近いから習得が困難である」「距離が遠いから習得が容易である」「距離が遠いから習得が困難である」という4つの視点を与えてくれる。換言すれば、「 $1+1=2$ 」という数学的な考え方ではなく、学習・指導の内容や方法などによって、全てが可変するということを示唆している。ここに英語学と英語科教育法の懸け橋となる機能が存在していると考えられるの

ではないだろうか。

「 $1+1=2$ 」という数学的な考え方ではない点は、「目に見えない音声」を知覚する際に必要不可欠である。「接続」(Juncture) という音声現象を基にした音声・音韻習得論では、「有標素性仮説」(Markedness and Feature Hypothesis: MFH) (大山 2015) が導き出された。この仮説は Markedness Differential Hypothesis (MDH) (Eckman 1977) と Feature Hypothesis (FH) (McAllister et al. 2002) の合わせた理論的枠組みで、1つひとつの音声現象に注目する「横の習得構造」と複数音声現象に注目する「縦の習得構造」を考慮したものであり、英語学と第二言語・外国語習得論とを繋ぐための1つとなり得ると考えられる。

6. 結 論

以上のように、3つの英語学(英語音声学、英文法、英語史)を英語科教育法との繋がりとして第二言語・外国語習得論の重要性を論じてきた。外国語(英語)教諭免許状取得において、平成30年度以降、本格的に始動する新学習指導要領に向けた文部科学省の「コア科目」の1つとして位置付けられていることから、上記の意義に気付き、指導できるようにしなくてはならない。PAM, SLM, MFH などの枠組みから、教員養成における英語科教育法(音声教育では大山(2016)など)で英語学の理論と実践を基にして、今日の英語教育下で、日本人が英語を学ぶ際に注目しなくてはならない点は何であるのか、英語を教える際に気を付けなければならない点は何であるのかという今後の英語教育学への寄与に貢献できると考えられる。

参考文献

- Best, C. T. (1995). A Direct Realistic View of Cross-Language Speech Perception. Strange, W. (ed.). *Speech Perception and Linguistic Experience*. Timonium, MD: York Press. 171-204.
- Eckman, F. R. (1977). Markedness and the

- contrastive analysis hypothesis. *Language Learning*, 27, 2, 315-330.
- Flege, J. E. (1995). Second-language speech learning. Strange, W. (ed.). *Speech Perception and Linguistic Experience*. Timonium, MD: York Press. 233-277.
- McAllister, R., Flege, J. E. and Piske, T. (2002). The influence of L1 on the acquisition of Swedish quantity by native speakers of Spanish, English and Estonian. *Journal of Phonetics*, 30, 229-258.
- 大山健一. (2015). 「連接」の三項目比較研究. 『創設30周年記念フォーラム』, 大東文化大学語学教育研究所, 30, 185-197.
- 大山健一. (2016). 英語音声学における音声教育の難易度. 『英文学思潮』, 青山学院大学英文学会, 89, 1-8.

Significance of English Linguistics with Methods in Teaching English:

Second and Foreign Language Acquisition Consideration
to Teacher Training for Japanese Learners of English

Kenichi Ohyama*

Abstract

This paper proposes how English linguistics is necessary in terms of teacher training. According to the training curriculum in Japan, the linguistics has been treated as three aspects: phonetics, grammar and history. These three linguistic factors, however, are not precisely linking in methods in teaching English, focusing only on learning the knowledge. The relationship between them is regarded as second and foreign language acquisition. When Japanese people study English, the theory can help them what kinds of points are significant to learn and teach. The consideration can be a sort of references to teacher training for both students and teachers.

Keywords: Methods in Teaching English, Teacher Training, English Linguistics, Second and Foreign Language Acquisition, English Education